海外出張の思い出（旧ソ連・ノボロシースク編 ⑨）

高島　敬明

　7月ごろだったと思います。日本では考えられないことが起こりました。この地方特有の強風が吹き荒れて仕事の中断期間が長引き、全体の工期に遅れが出ていたころでした。何とか工期に間に合わせるため据付け要員を日本から１チーム４名増員することになりました。派遣される作業員名簿が送られてきましたが、皆国内で一緒に仕事をした仲間なので、心強く頼もしく思いました。

　ところが、プロマネに誰が４人に同道してくれるのか聞きましたら、人選中とのこと。そして最終的にＴ貿易の人が一緒に来てくれることになりました、とだけ言われ通訳は同道しないとのことでした。私は、「４人とも現場の人で中にはローマ字も満足に書けない人もいるのです。通訳がいないとダメではないですか!」と強く抗議しました。しかし、プロマネはＴ貿易に重々頼んでありますから、と言うだけです。寺島さんにも相談しましたが、「高島さん、心配いりません。外国人はこの国では迷子になったり、行方不明になることは有りませんから」と涼しい顔で言われるだけでした。何を言われているのか分からず、私は心配で胃が痛くなる思いでした。

　案の定、到着の時間になってもとうとう到着しませんでした。プロマネに抗議して捜索をお願いしました。しかし、「そのうちに着きますから」と素っ気ない返事が返ってくるだけです。他の作業員と心配しながら待つしかありませんでした。まる３日過ぎた夕方遅く、プロマネが「これから迎えに行きましょう」と一言。「どこに行くのですか?」「マイクロバスの運転手が知っていますから」とのやりとりのあと、ともかく班長を連れて車に乗り込みました。街灯のない真っすぐな道を何時間走ったことでしょう。すでに夜の11時をまわっていました。しばらく行くと道端のようなところで車は止まりました。寺島さんがいないので状況は全く分かりません。１時間も待ったでしょうか。〈ブーーン〉という回転音がしてセスナを少し大きくしたような飛行機が着陸して少し手前で止まりました。機内から折り畳みの階段が下ろされ、飛行機の小さな照明の中、大きな荷物を持った見覚えのある面々が恐る恐る下りてきてキョロキョロしていました。班長が駆けつけると荷物を放り投げて手を取り合って喜んでいました。私は暗闇の中、涙目になり先が見えなくなってしまいました。

　外国人はいつも監視されているわけですから、この国では迷子になることはないのです。ようやく寺島さんの言う意味が分かりました。

　この件は一件落着しましたが、思いもよらない大事件（?）が起こりました。真夏のある日のことでした。計装屋（電気）さん、保温屋さんの大きな輸送梱包には余裕があり、先述のゴムボートもそうですが、サイクリングの折り畳み自転車、野球道具、何点ものレジャ ー用品が梱包の中にいっぱい入れていたのです。仕事場は海の近くなので、海水浴をしたりレジャー用品などで日々を過ごしていました。

　そんなある日、事件が発生したのです。夜の10時頃保温屋さんの責任者が私の部屋に入って来ました。まだ３人寮に帰ってきません、との報告です。

ギャングウエイの垂直に立てる作業です。一番の見せ場でした。

この頃になると街に繰り出し最終バス後にタクシーで帰って来るものが時々いたものですから、私もあまり気にせずもう少し待ちましょう、と気軽に話しましたが事情の分かっている責任者は心配そうな面持ちで、ぼそぼそと話しだしました。休日の今日朝食後、3人の作業員が半ズボンに自転車競技用のヘルメットをかぶり、何も言わずに日本から無許可で持ち込んだサイクリング用の自転車で勇躍遠くまで出かけて行ったそうです。

私は事態の深刻さにすぐ気づき、寺島さんに相談しましたが、「情報はこれ以上入りません。当局から連絡が有るまで待つしかありません」との返答でした。とりあえず海運省、交通警察に報告して待つしかないわけです。みんなが心配して待つこと3日、昼頃になってやつれた表情ながら3人とも元気で帰ってきました。色々聞いても当事者自身が何がどうなったのか理解できず、言葉も通じない中での留置でしたので待遇のようなものしか報告はありませんでした。結局、最新式のギヤ式自転車もかっこいいヘルメットも返されないままになってしまいました。

寺島さんの話では、港町であるノボロシースク市周辺は回教とロシア正教との宗教的な接点で非常にピリピリしているところであり、また国境に近いところから遠出する人は国民、外国人を問わずパスポートが必携のため、不審人物、パスポート不所持などの理由から収監されたのではないか、との見解でした。我々の寮の裏山の頂上付近の展望レストランを目指し昼には美味しい料理でも、との目論見だったことでしょうが、3日間鉄格子の中でトイレもままならず粗末な食事で辛抱しなければならない羽目になり、帰寮後は厳重注意を言い渡されることになったのでした(この事件は寺島さんの著書にも記載されています)。

このような作業員とは対極にある人物が寺島さんでした。寺島さんは希にみる人格者で曲がったことが嫌いで責任感が強く、そして温厚な人柄でした。常に同じ日本人としての誇りを持って仕事をしていました。こんなことがありました。鉄骨で組み上げたギャングウエイの上に3.5トン吊りの荷物積込用のクレーンがあります。クレーンは、G鉄鋼所で製作され仮組検査、運転指導には私が日本で立ち会いました。当然現場でのソ連側への引き渡しには私が立会い、指導します。海面から50メートル、の高さですので安全ベルトを締め、鳶さんの足袋を借りて垂直な梯子を登らねばなりません。班長から「空の流れている雲は見ないように」と注意されました。流れているものを見ると自分が倒れていると錯覚して手を放してしまうことがあるそうです。

寺島さんには年齢的に無理だから来ないようにと言い残し、ソ連人の監督官と二人で上って行きました。下で皆が見ているので私は強がって急いで上りましたが、緊張と高さで手はブルブル、喉もカラカラの状態でした。やっと頂上の運転席にたどり着いて下を見ると、なんと3分の2位のところに一段一段寺島さんが上って来るのが見えました。降りるように怒鳴りましたが、上って来るのです。高島さん、通訳がいないと困るでしょ!と言われました。目頭が熱くなりました。狭く、風の吹く中、少し揺れる中、30分くらいで無事引き渡しは終わりました。寺島さんとの絆が更に深まったように思いました。

さて、夜のミーティング、飲み会、反省会が毎日のように続いていましたが、ある時私の北海道での話になりました。寺島さんに私は土木技師であること、土木の中でも花形だった橋梁のゼミで勉強したこと、橋の工事につきたくてN社に入ったことなどを話しました。北海道では、小樽築港の倉庫群に向かう跨線橋、帯広でも駅の近くで大きな跨線橋の工事に携わったことなどを話している時、寺島さんの目が微笑むように輝きました。そしてぼそぼそと話し出されたのです。父親が道庁に勤めていて道内を転々としましたが、帯広にも住んだことがあります、と遠くを見る様に、昔を思い出しているかのように話しだされました。生まれは根室で貧しく育ったこと、兄弟は姉さん兄さんが何人かいたこと、とどまることなく話し出されたのです。

歴史の一ページを飾った寺島儀蔵さんの波乱の人生は、一部これまでに書いた内容と重複するところもありますが、寺島さんの語り口に極力近づけて次号に書いて行く予定です。　(続く)